農業経済学の本の紹介

私は、大学入試の資料がたくさんある「赤本」の九州大学経済学部の紹介の中に、農業経済学に詳しい教授がいるからということで、農政を学ぶために経済学部に入りました。本当は京都大学の農学部に出願していたのですが、東京大学の入試が中止になったので、九州大学には入試の指定科目があった関係もあって、物理指定の農学部が受けられないので地学指定の経済学部にしたというやむを得ない事情もあったのですが、無事に合格できました。九州大学では３年生から、農業政策の専門家であると赤本に載っていた、都留大治郎教授のゼミに参加させていただきました。もっともそこで学んだのは、マルクスとレーニンとヒルファーディングと都市工学やハロッド＝ドーマー理論などの一部の近代経済学理論であり、農政について教えてもらった記憶はほとんどありません。そのために私は個人的に、下記の各種の農業に関する書籍を購入し、学びました。

学生時代のころの自民党政府による「基本法農政」それに続く「総合農政」で展開される農業政策は、まさしく破滅的な農政であり、農政の専門家の先生たちは、日本政府そして自民党の農業政策に怒りをもって意見を述べられていました。（後掲の書籍参照）　当時４～５ヘクタールという日本の平均的な耕作面積よりは広い農地を保有していた私の家では、まさに朝から晩まで、国の農業政策に怒りを感じながら、働いていました。そしてトラックの助手席には、マルクスの資本論や東京大学の大内力先生の本などがいつも乗っており、ベッドに横になる時にはいつもこれらの本を抱えて眠っていました。（笑）。

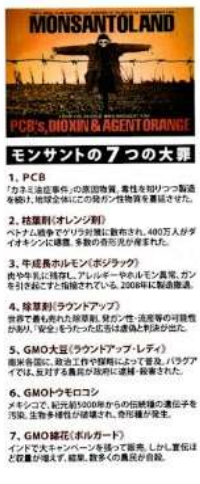
しかしここ２０年の学習で、私が書いている別掲の文書のように、日本のコメ余り現象も過疎化も、アメリカが自国の小麦農家を守るために行った、日本のコメ中心の農業潰しの意図的な政策であったことや、１９７０年以降のオレンジの自由化の動きも、アメリカの果樹産業を守るためであり、更にアメリカ合衆国がそのような政策をとらなければならなかった直接の原因は、アメリカの対日貿易赤字であり、その間接的な原因はベトナム戦争や東西の冷戦構造であることもあって、日本政府の農政に苦情を言っても、アメリカの強欲な自国優先の、日本という「アメリカにとっては敗戦した属国という位置づけ」の国への、２０２０年の今も続く日本いじめの中での政策であったことそしてあり続けることに対して、怒りを通り越して、ただ諦めるだけの農政でしかなかったことを受け入れて、現在の日々を送っています。（泣）。

それでも、山本太郎さんや柴咲コウさんたちが、強欲なアメリカ企業によるさらなる日本の農業壊滅政策に対しては、具体的には種苗法改正やＴＰＰ関係などの問題に対しては、懸命に日本の農業を守ろうとされている事への応援をしてほしいという願いは尽きません。（ネットで検索をしてください、すぐに事情が分かります）令和新撰組の山本さんが、農業を大切にされるのは、言うまでもなく小沢一郎さんの指導によるものです。その意味でも、小沢さんは、アメリカという国家に抵抗して、日本の農業を守ろうとする大親分なのですが、しかし多くの農民がそのことに気がついていないのがとても残念です。１９６０年代のＪ・Ｆ・ケネディ大統領の頃から、アメリカ合衆国は「世界の情操操作」後とても上手にそして巧妙になり、日本のメディア支配とも相まって、日本の普通の国民、まして肉体老で頑張って疲れ果てている農民には、このような真実が理解されることもなかったし、今後もないでしょう。（別掲「人道的帝国主義（ジャン・ブリクモン）」

それにしても農政については学べませんでしたが、九州大学の都留さんはとにかく魅力的な教授で、大学の中でも人気ものでした。私たちの様な学部生は、教授の教え子であるとは認めていただけるわけではないのですが、それでも彼の学恩には、現在も深く感謝しています。彼の子供さんは一橋大学の教授になられているはずです。

「いまさらＩＴ時代に農業政策を学んでも仕方がない」と普通の人は考えるでしょう。しかし気象変動や絶滅種の増加、そして遺伝子組み換え食品や農薬が世界樹の人類や動物に「奇形」をもたらしている今の時代こそ、過去の時代以上に「農政」について学ぶ必要があるのではないのでしょうか。人間はあくまでも動物なのであり、その生き物である人間を育て守ろうとする学問である農業政策と、それをつくる農業技術へのさらなる研究が必要であると考える必要があると私は考えています。もちろん世界経済論という視点から、今後の国

家関係がどのように展開していくかは、このホームページの別のところにも記述しております。(一部の書物を下記に紹介しています)



【上・左】モンサント社の世界の農業や人類や生物に与えている被害についてはこのＨＰの各所にあります。

【上】都留教授の本

【上下左右】総合農政という農業壊滅政策批判本

【上】昔のテレビ人気人形劇「ひょっこりひょうたん島」で有名な井上ひさしさんの本です。人気小説「吉里吉里人」などを通じて、彼は終生「農業を守るべし」と主張されていました。